

自主シンポジウム10

和田實の遊び論をどう受け継ぐか

企画者 宍戸 健夫(同朋大学)

竹内 通夫(金城学院大学)

司会 宍戸 健夫

話題提供者 湯川嘉津美(上智大学)

日吉佳代子(東京教育専門学校)

竹内 通夫

指定討論者 宍戸 健夫

I. 和田實の幼児教育思想の歴史的位

和田は、1876(明治9)年、に生まれ、師範学校を卒業後、一時、小学校の教師を勤めるが、後、東京女子師範学校助教授となる。1908(明治41)年、中村五六教授と「幼児教育法」を刊行した。

今日、この書は、フレーベル主義を排し、本格的な幼児教育理論を確立しようとした書とされている。

1915(大正4)年、女子師範を退職し、自ら、目白幼稚園を創設した。そして、1930(昭和59)年、目白幼稚園保育養成所(現東京教育専門学校)を開設した。

そして、1937(昭和12)年、には、第7回世界教育会議において、幼稚園教育についての講演を行なっている。

和田は、生前、四冊の著作を残している。

「幼児教育法」(中村五六との合著、1908)

「幼児保育法」(1913)

「実験保育学」(1932)

「保育学」(1943)

この他に、約90編の論文を収めた「和田實遺稿集」(1976)がある。

和田の幼児教育思想は、「幼児教育法」でその基本骨格が提示され、「幼児保育法」「実験保育学」で保々完成されており、終生、その思想的根幹は不変であった。1954(昭和29)年に、77歳の生涯を終えている。本年は、没後50年に当たる年である。

和田の教育思想は、以下のように集約できると考えられる。

1. 幼児教育の「学」としての確立—教育の科学的研究—

幼児教育は、「学」と呼ばれる組織的理論がない。和田は、科学的教育学の研究の必要性を追求した。

2. 自然主義的幼児教育(保育)

和田は、幼児教育の方法は、教授的、鍛練的方法ではなく、徹底して(感化)誘導的方法による事を主張した。

3. 遊戯的教育論の展開

遊戯は、幼児の自然的本能にもとづく自発活動であり、これにより心身の健全な発達がある。遊戯は、学習ではないとして、遊戯的教育論を展開した。

和田が明治時代にめざした科学的幼児教育を、私たちは、幼児教育史の中に位置づける作業が必要である。

II. 和田實の幼児教育思想の特色

1. 和田実は、明治41年に中村五六との合著で「幼児教育法」を著し、人格の基礎を培う乳幼児期の保育を、教育の体系に位置付けて論じ、幼児教育の重要性を終生一貫して主張した人である。「幼児教育」という言葉は、和田実によって初めて使われたのである。

2. 和田実の主張した幼児教育論とは

(1) 幼児教育は、「しつけ」と「遊び」によって、幼児の諸性情を誘導するのが本領である。知能の発達、遊びの発展に伴う自然の要求に応える程度に任せるべきものである。幼児期に積極的に学習を強いる事は、徒に遊戯生活の自由を奪い、その自主創造性の萌芽を枯死させるものである。

(2) 幼児の教育計画は、抽象的に大まかであること。幼児教育の計画が詳密で具体的であると、徒に幼児を刺激し神経質にして、幼児の可能性を狭めてしまう。幼児教育の計画は、教師の頭の中に抽象的に大まかに方針をたてるだけでよいのである。

(3) 幼稚園にカリキュラムはいらない。カリキュラムとは、学習課程の意味である。幼稚園には学習作業を課すべきではない。幼稚園の誘導教育は、指導的学習教育とは異なるものである。

(4) 幼児教育は、感化誘導である。誘導とは、環境の魅力に引き付けられて、知らず識らずの中に感化されることを意味する。指導とは、合理的に意識的に納得し理解することを主とするものである。幼稚園教育は感化誘導を主とし、学校教育は指導的問答によって知能的学習を主とするという違いがある。

3. 和田実と倉橋惣三の誘導保育論の相違点

和田は明治39年に「幼児教育の特色」の論文中で、「誘導」の概念を使っている。家庭でも幼稚園でも託児所でも、幼児の生活のすべてにおいて、乳幼児の教育の根本原則は感化誘導であると述べている。一方倉橋は、昭和9年刊の「幼稚園真諦」で、幼児の生活の自己充実の後にその生活の断片にまとまりをつけるよ

うに系統づけていく為に、何か主題を与え誘導していく、それが誘導保育である。これは幼稚園において取るべき方法で、一般家庭ではむずかしいと述べている。和田が誘導保育を主張してから28年後のことである。

III. 和田實の遊び論

和田は、その生涯において、四つの著作と多くの論文を残しているが、遊び論の基本的な考えは、すでに、最初の著作「幼児教育法」(1908)にあり、次いで、「幼児保育法」(1913)において、少し構想を修正し、「実験保育学」(1932)に至って、結実したものととなっている。

1. 和田の発達観

和田の子どもの発達に関する考え方をみると、「子どもの発達は、継続的である。前の発達は後の発達の基礎となる。直観の発達は観念の発達の基礎であるし、観念の発達は知覚判断の基礎であるし、知覚判断の発達は概念推理の発達の基礎である。」と述べている。(1932)

これは、現代的発達観であり、ピアジェの発達観に近似している。

2. 遊戯の定義

和田は、遊戯を幼児の発動的自己活動としてとらえ、次のように定義をしている。

「遊戯なるものは、生理的基礎を有する諸種の衝動と此の衝動の満足により得られた興味を根拠として発達したる幼児の自発活動であって幼児は之があるが為に発達し之があるが為に未来を準備し得るものである。」として、「衝動」と「興味」と「自発活動」を強調している。(1908)

3. 遊戯の分類

和田は、「実験保育学」で結実した遊戯論を、「自己活動」の二つの側面として、

(1) 経験的収得的遊戯

(2) 発表の遊戯(模倣的遊戯と練習的遊戯)

を強調している。

特に、前者は、フレーベルの自己活動論の批判から出されたものである。

4. 和田の誘導保育論

和田は、倉橋より約30年前に訓育的誘導論、遊戯における誘導的方法を強調した。

遊戯において、「観察」、「実験」、「鑑賞」を強調したのは、幼児の興味の追求性、暗示模倣性を重視したものである。

5. 和田の遊戯論・発達論の示唆するもの

和田の幼児教育論は、彼の努力と研鑽の賜物であり、当時としては、異例なほどの外国の教育思想を吸収し、その幼児教育論は、論理的・体系的である。

そこにあらわされた発達論は、発生的・構造的な捉え方をしており、ピアジェ理論に近いものを感じさせる。

遊戯論においても、幼児の発達を念頭に置いた発達の遊戯論を展開した。

「幼児の自己活動としての遊戯」という考えは、時代をはるかに抜きん出た卓越せる理論的見解といえるものである。同時に、この事は、彼の教育論や遊戯論が、今日のわが国の幼児教育に多くの示唆を与えるものをもっていると考えられるのである。

IV. 指定討論者として和田研究に望むもの

和田が、中村五六との共著として著した「幼児教育法」(1908)は、それまでの恩物中心の保育を遊び中心の保育へと転換させるための画期的な著作である。

この本での、「経験的遊戯」「模倣的遊戯」「練習的遊戯」の三つの類型化は、ピアジェの「機能遊び」「象徴遊び」「ルール遊び」という遊び論に近いものがある。しかも、日本の子どもの遊びに即して、遊びがどのように発達していくかを考察するものであった。

この本を出発点として、和田の幼児教育論が、どのように発展していったかが、解明されなければならない。そして、日本の幼児保育理論史の上に、どのように位置づけなければならないのか、話題提供者の提案を期待したい。